

「イギリス・イメージ調査」中間報告

渡辺 愛子

はじめに

本研究ノートは、文部科学省科学研究費基盤研究（C）「創造された伝統としてのイギリス文化の価値に関する理論的・実証的研究」（No. 24510358）の一環として行った、日本における「イギリス」あるいは「イギリス人」に対するイメージ調査の中間報告である。

イギリスは20世紀末のトニー・ブレア労働党政権誕生以降、国家のブランド戦略をその政策基盤のひとつに据え、対外文化政策において諸外国がイギリスをどう見ているのかを調査し、その後の政策形成に役立ててきた。ブリティッシュ・カウンシル（The British Council）⁽¹⁾が1999年と2000年に行った‘Through Other Eyes’（以下、TOEと略記）⁽²⁾および2014年の‘As Others See Us’⁽³⁾はその代表的なものであり、TOE（2000年）に関しては日本も調査対象となっている⁽⁴⁾。本イメージ調査の最終目的は、このTOE調査から10年以上が経過した現在、日本におけるイギリスへの印象がどのように変化したのかを把握し、イギリスの日本に対する国家投影（‘the projection of the United Kingdom’）の成果がどれほどのものであったのかを見極めることである。現在も本研究課題は進行中であるが、今回の研究ノートではここまでの調査結果の概要を中間報告としてまとめ、それをもとに分析手法に関する問題点や調査そのものから見えてきた課題を提示し、必要であれば方向修正を行うことで、最終報告書に生かしていきたい。

調査方法

調査の媒体には、インターネットを使用した。2012年10月に「イギリス・イメージ調査」と題したウェブサイトを立ち上げ（右図）⁽⁵⁾、以来、アンケートへの回答を募っている。質問項目は大問で33題、予定回答時間は約10分である（本中間報告の末尾の付録に全質問を



「イギリス・イメージ調査」HP 告知画面

基本情報（総サンプル数 175）

実施言語	第一言語		年齢層		性別		渡航経験	
日本語	日本語	163	10代	62	男性	68	ない	114
	英語	1	20代	84	女性	107	観光旅行あり	27
	中国語	7	30代	22			短期滞在 (1年以内)	24
	韓国語	4	40代	5			学位取得 (ディプロマ以上)	9
			50代	2			就労経験あり	1

2015年12月末日現在

掲載した)。また、質問内容は比較を容易にするため、上述のTOE（1999, 2000）とほぼ同じ内容としている。そして今回の中間報告では、2012年10月中旬より2015年12月末日までの約3年2か月までを調査対象期間とした。

日本におけるイギリスのイメージ調査を目的とするため、ウェブ掲載言語は日本語であるが、回答者は本調査が理解できる日本語能力があれば、国籍は問わない⁽⁶⁾。上表の基本情報からもわかるとおり、総サンプル数175のうち日本語を第一言語としない者は12人いたが、ほとんどが日本語を第一言語とした、渡英経験のない10代と20代の若者であった。年齢層に偏りが出ている原因として、私が現在大学で担当している授業で、学生にこの調査について周知していることが少なからず影響していると思われる。しかしこのことは、はからずもブリティッシュ・カウンシルが行った調査でターゲットとした年齢層と近い状況を作り出した。TOE（1999, 2000）でインタビュー対象となったのは、教育を受け（‘well-educated’）、収入が平均以上の（‘above-average incomes’）24歳から35歳までの若い世代である。ここから、ブリティッシュ・カウンシルが「将来の社会を担う若い世代」（‘successor generation’）⁽⁷⁾のイギリスに対するイメージに関心を抱いているのは明らかだ。

参考までに、以下にTOE（1999年・2000年）の調査結果と考察を簡単にまとめておく。

- ・ 諸外国がイギリスに対して抱いている古びたイメージを変容させ、先進的なイメージを投影するために、イメージ調査は必要である。
- ・ 一般的に、ある国を知ることによって、その国への好感度も増すようである。
- ・ 諸外国のイギリスに対するイメージは全体的に好意的ではあるが、イギリス人に対してはしばしば冷淡であるという否定的なイメージを持っている。
- ・ イギリスの認知度はアメリカ合衆国よりも低く、好感度もアメリカに劣

る。とくに調査当時、中国ではイギリスに対して過度に否定的な見解が見られたが、その理由については定かでない（香港の中国への返還や、ベオグラードの中国大使館への爆撃が影響したか）。

- ・英語はどの国においても重要だと認識されている。
- ・留学先としてはアメリカの次に人気が高い。
- ・科学と技術については、アメリカ、日本、ドイツよりも劣っていると考えられている。
- ・イギリスの商品には定評がある一方、イギリス企業の力はアメリカ、日本、ドイツにおよばないと考えられている。
- ・アートとデザインに関しては、現代ものよりも伝統的なもののほうが好まれている。
- ・イギリス社会は現代的というよりは伝統的だと考えられている。
- ・イギリス社会は民主的で多文化化が進んでいる一方、人種の平等に向けた活動には熱心でなく、外国人の受け入れにも消極的だと思われる。
- ・イギリスは国際関係において、EUやコモンウェルス諸国に比べ、アメリカを特別視し、EUへの愛着度もドイツやフランスに比べて低いと思われる。
- ・イングランドやスコットランドへの理解度は、北アイルランドやウェールズよりも高い。
- ・有名人として上位にあるのは、エルトン・ジョン、トニー・ブレア、スパイスガールズである。
- ・イギリスのメディアは真実をつねに伝えているかはわからないが、ほかの国よりは信頼性が高い。
- ・とくに日本にとってイギリスに関する主だった情報収集先は、日本国内の新聞やテレビニュースである。
- ・イギリスの強みとして堅調な経済と「伝統と遺産 (heritage)」が挙げられるが、後者については同時に弱みとも見られている。

調査結果と考察

以下に、現在進行中の調査の結果を概説していく。今回は研究ノートという性格上、紙面の都合ですべての項目を網羅的に記載することができず、グラフや表も最低限簡略化したものを使用した。また、図表を示さずに回答の概略のみを示したものもあることを断っておく。以下、引用した質問番号「No. XX」は現行ウェブサイトのものをそのまま使用している。

《Section 1：諸外国との比較から見たイギリスのイメージ》

ここでは、いくつかのテーマに沿って、世界における主要諸国（アメリカ合衆国、イギリス、オーストラリア、中国、ドイツ、ロシア）のイメージを尋ねた。まずNo. 6「認知度」では、イギリスはアメリカとともに高く、80%以上が「かなり知っている」「少し知っている」と回答し、ほかの4か国が「少し知っている」「ほとんど知らない」で90%以上を占めている状況とは好対照である〔下表を参照〕。No. 7「好感度」ではドイツとともに「非常によい印象」「まあまあ好印象」で76%を獲得し、これは、よく知ってはいるが「あまり印象はよくない」で21%のアメリカとの大きな違いである〔下表を参照〕。No. 8「貿易の相手国」

6. 以下の諸外国のことを、どれほど知っていると感じますか。						
	USA (アメリカ合衆国)	UK (イギリス)	AUS (オーストラリア)	CHN (中国)	GER (ドイツ)	RUS (ロシア)
とてもよく知っている	6	8	3	5	2	0
	3%	5%	2%	3%	1%	0%
かなり知っている	44	38	12	14	14	7
	25%	22%	7%	8%	8%	4%
少しだけ知っている	108	103	79	102	87	52
	62%	59%	45%	58%	50%	30%
ほとんど知らない	17	26	78	51	70	104
	10%	15%	45%	29%	40%	59%
わからない	0	0	3	3	2	12
	0%	0%	2%	2%	1%	7%

7. 以下の諸外国について、どのような印象を持っていますか。						
	USA	UK	AUS	CHN	GER	RUS
非常によい印象を持っている	13	44	31	3	36	3
	7%	25%	18%	2%	21%	2%
まあまあ好印象	84	89	82	12	96	26
	48%	51%	47%	7%	55%	15%
どちらでもない	37	30	41	37	38	78
	21%	17%	23%	21%	22%	45%
あまり印象はよくない	37	12	10	80	4	57
	21%	7%	6%	46%	2%	33%
非常に印象が悪い	3	0	4	43	0	5
	2%	0%	2%	25%	0%	3%
わからない	1	0	7	0	1	6
	1%	0%	4%	0%	1%	3%

としてはアメリカが「最優先国」「主要国」（合計で94%）であると考えられている一方で、イギリスは地理的に遠い国と感じられているのであろうか、「主要国」「あまり重要でない」という分類で大部分を占めている（合計で88%）。これは、同じくヨーロッパに位置するドイツとほぼ同様の数値（合計で87%）である。このことに関連し、No. 9－A「世界的に有名な企業」を持つ国として、「多く持っている」印象が強いのは断然アメリカであり（91%）、イギリスで過半数を占めたのは「そこそこ持っている」（51%）のみであった。以上のことから、イギリスについての諸外国の認知度・好感度は高い一方で、貿易相手としてはそれほど重視していないことがわかった。つまり、好意的にとらえられることと、ビジネスパートナーとしての信頼度とは必ずしも一致せず、このことは先述のTOE（2000）でも指摘されている。実のところ、1934年にブリティッシュ・カウンシルが設立されたときの目的のひとつに、対外交易を促進してイギリス経済を活性化させることがすでに掲げられていることから、国内経済の活性化は20世紀以降のイギリス対外文化政策がつねに目指してきたことであると言ってよい。よって、今回の調査において、日本から見てイギリスが貿易の相手国としていまだ強く意識されていない事実は見過ごせない結果であるといえる。なお、アメリカについては肯定的・否定的なイメージが質問内容によって変化し、中国に関しては、好感度については否定的な見解が大勢を占めている反面（「あまり印象はよくない」「非常に印象が悪い」で71%）、貿易国としては無視できない存在（59%）であると認識していることがわかる。ロシアも中国に対するイメージと類似している部分はあるが、中国よりも認知度がさらに低いことから（「ほとんど知らない」が59%）、それ以降の質問も回答者にとって不明瞭なものが多いと推測できる。ちなみに、No. 9－B「このほかに有力企業を想起させる国」として上位に挙げたのは、韓国（55票）、フランス（49票）、日本（25票）、イタリア（19票）、スイス（13票）であった。

さて、先ほど同じヨーロッパに位置するイギリスとドイツの類似点を指摘したが、No. 10－A「先進性」のイメージでは、両国には多少の差が生じている。すなわち、イギリスについては先進性を「多く持っている」が25%、「そこそこ持っている」が52%であるのに対し、ドイツに関しては「多く持っている」が43%で「そこそこ持っている」が38%であった。日本におけるドイツ製品の定評の高さが現れているといえるだろう。このことについては、TOE（2000）でも同様の結果がみられる。

そしてこのNo. 10－A「先進性」について高評価を得たのはまたもやアメリカ合衆国であり、先進性を「多く持っている」と答えた回答が90%であることから、アメリカは科学技術・産業の分野において不動の地位を確立していると

11. 以下の項目を発明・開発したと思われる国を教えてください。					
	USA	UK	GER	JPN (日本)	わからない/ 知らない
ペニシリン	18	49	51	22	35
	10%	28%	29%	13%	20%
WWW (The World Wide Web)	128	23	3	0	21
	73%	13%	2%	0%	12%
クローン技術	74	57	20	8	16
	42%	33%	11%	5%	9%

考えられていることがわかる。反面、イギリスが技術革新を推進している国というイメージはほとんど持たれていない。No. 11. 『『ペニシリン』『WWW (The World Wide Web)』『クローン技術』を発明・開発したと思われる国』について、正解はすべてイギリスなのにもかかわらず⁽⁸⁾、『ペニシリン』はドイツ (29%)、『WWW』はアメリカ (73%)、そして『クローン技術』もアメリカ (42%) とする回答が最も多かった〔上表を参照〕。この結果をTOE (2000) における日本の回答と比較しても、WWWについてはアメリカ (74%) とする回答がほぼ同値だったことは興味深い。一方、『クローン技術』については、クローン羊の誕生などが話題となりニュースとして日本でも流れていた時期と重なっていたためか、今回よりも2000年実施の調査のほうが正答率は高かった (「イギリス」と回答=56%、「アメリカ」と回答=25%)。

《Section 2：英語の重要性和イギリスとの関係》

世界語と言われる英語は、No. 14「習得したい外国語」のなかでも圧倒的に多く、175人中135人 (77%) を占め、2位のスペイン語 (12人・7%) を大きく引き離している。重要とする局面別に見ると、No. 15-(1)「国際的ビジネスにおいて」(86%)、(2)「教育において」(49%)、(3)「海外旅行において」(44%) のすべてで、「非常に重要」という回答にもっとも多くが集まっていた〔右表を参照〕。こうした英語への関心の高さは、No. 12「留学先」として選ばれた国

15. 「英語は世界語」とよく言われますが、以下の各項目ではどの程度重要だと思いますか。			
	(1) 国際的ビジネスにおいて	(2) 教育 (国内および国外) において	(3) 海外旅行において
非常に重要	150	85	77
重要	24	62	62
あまり重要ではない	1	24	33
まったく重要ではない	0	2	2
わからない	0	2	1

の上位にアメリカ（52%）およびイギリス（76%）が挙げられていることから納得がいく。イギリスのほうが数値が高い理由として、回答者の多くが私のイギリス関係の授業を受講している可能性は否めない。あるいは、治安に対する不安がつねに付きまとうアメリカへの留学を敬遠したいという心理がはたらいたのかもしれない。しかし、イギリス優位の結果がビジネスに直結するというわけではなく、No.13「将来のキャリアアップにつながる教育」を行っていると思定される国の1位にはアメリカ（43%）が返り咲いている。この項目に関してイギリスは9%（16人）と大きく数値を落としている。

《Section 3：「イギリス」に対する印象》

では、「イギリス」そのものに対するイメージについてはどうだろうか。まず、基礎知識として、No.16「この連合王国を構成する国々」を尋ねたところ、イングランド、スコットランド、ウェー

ルズ、北アイルランドと正解した率は39%（69人）にとどまった。No.17「イギリスと言えば、なにを思い浮かべるか」〔上表を参照〕という問いについてはさまざまな回答が得られたが、今回最上位にきたのは「紅茶（「アフタヌーン・ティー」「ティー・タイム」を含む）」（29票）で、その後に「王室」「ビッグ・ベン（国会議事堂）」（同23票）と続いた。この結果は、2013年に英国航空（British Airways）が発表したアンケート調査結果^⑨を思い起こさせる。そこでは、イギリスについて好きなものの第1位は「建築」、第2位は「紅茶」であった。今回の調査結果にもある2位の「ビッグ・ベン」や、少数票であった「バッキンガム宮殿」「貴族の邸宅」（各3票）、「建築」（1票）という回答を合わせれば、「イギリス建築」が今回の回答者にとっても関心を引くものであることがわかる。

No.24「イギリス出身の著名人」〔次頁の表を参照〕に関する質問では、1位をマーガレット・サッチャーとウィンストン・チャーチルという、20世紀の政治

17. イギリスと言えば、なにを思い浮かべますか。3つ以内でキーワードを挙げてください。わからない場合は空欄可。（上位10回答）

紅茶（アフタヌーン・ティー）	29
王室	23
ビッグ・ベン（国会議事堂）	23
ロンドン	19
ビートルズ	19
ユニオンジャック	15
紳士	13
英語（イギリス英語、クイーンズイングリッシュ）	13
フィッシュ&チップス	13
エリザベス女王	13
サッカー（フットボール、プレミアリーグ）	12
悪天候（雨・霧・曇り空）	12
料理がまずい	11
階級（階級社会・階級差別）	9
ハリー・ポッター	9
ウィリアム・シェイクスピア	9
大英帝国・植民地	9
ロック（音楽）	8
シャーロック・ホームズ	8
大英博物館	7

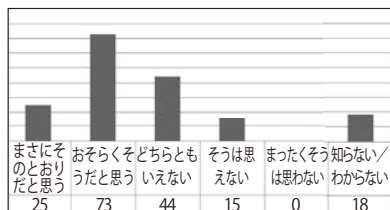
家が占めている。一見納得の行く結果ではあるが、サッチャーはこのウェブ調査実施中の2013年4月に没し、その前後に映画の公開⁽¹⁰⁾やテレビ番組での特集なども組まれたことから、通常よりも人々の記憶に新しかったのかもしれない。右表では、今回の調査で上位10位までに入った著名人を挙げた。先の項目でも上位を占めたイギリス王室からは、エリザベス2世とダイアナ元皇太子妃が入った。下位票までを含めると、チャールズ皇太子は5票で11位、ウィリアム王子は3票で13位となり、ここからも王室がイギリスを象徴する大きな存在であることがわかる。そして、イギリスの現代的イメージを押し上げることに大きく寄与していると思われるロック音楽については、ビートルズ（13票・5位）からジョン・レノン（24票・2位）とポール・マッ

カートニー（12票・6位）が入り、相変わらずの人気の高さを印象付けている。大衆文学からは『ハリー・ポッター』シリーズの著者J.K.ローリングが14票で7位、映画版で中心的な役を担ったエマ・ワトソンは7票で9位に入っている。ワトソンは最近、ジェンダーの平等を訴えて国連でスピーチを行ったり、フェミニズムを支持する考えを公にして話題となったことから⁽¹¹⁾、主演のダニエル・ラドクリフ（5票・11位）よりも印象が強いのだろうか。英文学ではシェイクスピア、ディケンズのほか、表以外にもアガサ・クリスティ（4票・12位）、ルイス・キャロル（3票・13位）、ジョージ・オーウェル（2票・14位）、ビアトリクス・ポター（同）が挙がり、さまざまなジャンルの英文学を支持する層が厚いことがうかがえる。さらにスポーツについては、依然サッカー人気が根強く、今回の調査でもディヴィッド・ベッカムがジョン・レノン、シェイクスピアと並んで24票を集め2位に入っている。

古びた社会のイメージからの脱却は、長いことイギリスにとって克服しなければならない課題であった⁽¹²⁾。しかし現在もなお、日本がイギリスに対して描くイメージは伝統に根ざしている部分が大いといえそうだ。イギリス社会について、No.22「どれほど現代的（モダン）で、どれほど伝統的なイメージを持っているか」という問いに対し、「伝統的」（52%）という回答が過半数を超え、「現代的」とする回答（20%）に大差をつけている。イギリスの芸術に関していえ、

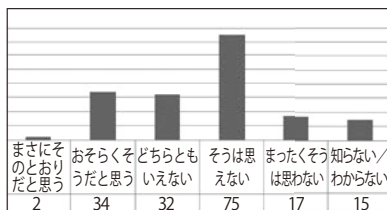
24. イギリス出身の著名人を3人以内で挙げてください。知らない場合は空白可。 (上位10回答)	
マーガレット・サッチャー	25
ウィンストン・チャーチル	25
ディヴィッド・ベッカム	24
ジョン・レノン	24
シェイクスピア	24
エリザベス2世	15
J. K. ローリング	14
ビートルズ	13
ポール・マッカートニー	12
ダイアナ元皇太子妃	11
コナン・ドイル	10
エマ・ワトソン	7
チャーリー・チャップリン	6
チャールズ・ディケンズ	6

「イギリス・イメージ調査」中間報告



23. 芸術性

(2) 名声は過去作品による



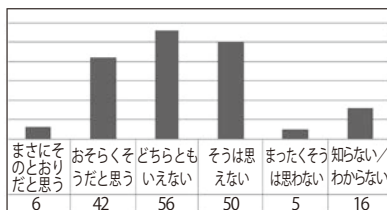
26. 現代イギリス社会

(4) もはや階級社会ではない

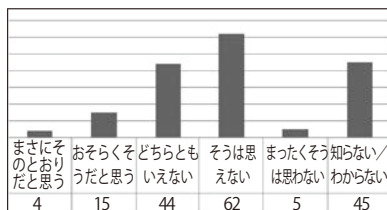
No. 23- (1)「創造性と革新性」を認めてはいるものの、23- (2)「イギリスの芸術における名声は、現在よりも過去の作品によるところが大きいの」について、「まさにそのとおりだと思う」(14%)と「おそらくそうだと思う」(41%)の両方でやはり過半数を超え、イギリスは過去の栄光に寄り添っている国であるというイメージが広く定着していることがわかる〔上のグラフを参照〕。

No. 26は、現代イギリス社会に関する回答である。No. 26- (1)「イギリス政府は民主的政府の好例」かどうかについて、議会制民主主義発祥の地としての知識が手伝ってか、半数近い回答が「おそらくそうだと思う」(44%)と答えた。女性の権利確立についても西欧諸国のなかで早くから議論が起こった国として知られているが⁽¹³⁾、No. 26- (9)「イギリス社会における女性差別」に関しては、否定する回答がもっとも多かった(35%)〔次頁のグラフを参照〕。一方、イギリス社会の形容詞としてよく知られたNo. 26- (4)「階級社会」についてのイメージはいまだに強く、43%が階級が社会に定着していると見ている〔上のグラフを参照〕。そしてもう一点、現代のイギリス社会は大都市を中心に多文化化・多民族化が進行しているが⁽¹⁴⁾、No. 26- (5)「イギリスは真の多文化社会」だと考えられるかどうかについては見解が分かれている〔次頁のグラフを参照〕。この問いは、No. 26- (10)「イギリス人は外国人に対して好意的」か、No. 26- (11)「異人種に対して寛容」かともリンクしており、回答傾向が類似している〔次頁のグラフを参照〕。

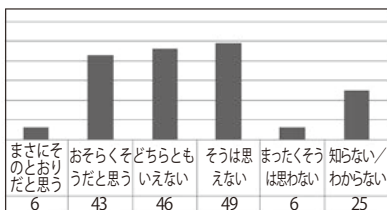
No. 31「全体的にみて、イギリスの持つ主要な弱点はなんだと思うか」という質問に関しては、北アイルランド問題をはじめとするテロや戦争を想起する回答がもっとも多く(91票)、次いで「人種差別や外国人嫌い」を挙げる回答が続いた(54票)〔71頁の表を参照〕。また、古臭い、伝統的、保守的、そして階級社会であることが否定的にとらえられていることもわかる〔同上〕。しかし、TOE(2000)の調査結果と同様、No. 32「主要な強み」に注目してみると、「世界語としての英語」(128票)と一票差で「伝統文化—文化的遺産—保守性」(127票)



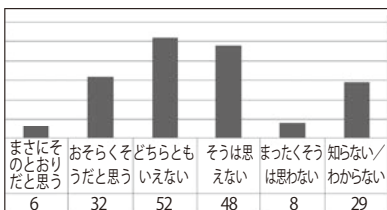
26. 現代イギリス社会
(5) 真の多文化社会である



26. 現代イギリス社会
(9) 女性に差別されている



26. 現代イギリス社会
(10) イギリス人は外国人に対して好意的



26. 現代イギリス社会
(11) イギリス人は異人種に対して寛容

が挙がっており、「栄光ある過去—イギリスの旧植民地とその歴史」(44票)も含め、さきほどの否定的イメージが肯定的にもとらえられていることがわかる〔次頁の表を参照〕。つまり、伝統や保守性といったイギリスのステレオタイプは、否定的にとらえられることがあるものの、戦略次第では、イギリスを「売る」ための格好な要素であるということができよう。

最後に、No. 33「イギリスに関する情報源」として、前回の調査と大きく異なる部分は、「インターネット」が102票を獲得して1位に躍り出たことであろう。TOE調査(2000)では、とくに日本において自国の新聞やテレビニュースが主流な情報源となっていたが⁽¹⁵⁾、今回もその数値は依然として高く、87票であった。もっとも、それ自体がもはや紙媒体ではなく、インターネット経由の情報である可能性も十分にある。インターネット情報が人々にもたらす影響力はますます大きくなっているのは明らかだ。ブリティッシュ・カウンシルは、さきのTOE調査(2000)の結果を受け、海外のローカルニュースやテレビにどれだけイギリスの情報を売り込むかを課題として掲げていたが、イギリスの対外文化政策全体がインターネットを有効活用するよう方向転換して久しいことから、イギリスにとってはこの「扱いやすい」媒体を、自国の海外への投影戦略に今後も有効活用していくことになるだろう。

「イギリス・イメージ調査」中間報告

31. 全体的にみて、イギリスのもつ主要な弱点はなんだと思いますか。以下から選択してください。 (複数回答可・上位10回答)	
北アイルランド問題—宗教—戦争—国内的対立—テロリズム	91
人種差別—人種主義—外国人嫌い—偏狭・非妥協的気質—不親切さ	54
悪天候—霧—雨	53
伝統的—保守的—一時代遅れ—革新的でない—柔軟性に欠ける	52
階級社会	49
自国に過去の栄光にすぎりすぎ—すでに世界的覇権を失っているにもかかわらず、過去のイギリス帝国(大英帝国)の幻想をいまだ拭いきれないところ	46
生活費の高さ	41
紳士気取り—傲慢—高飛車	36
不景気	31
ヨーロッパやEUに関する無関心	30

32. 全体的にみて、イギリスのもつ主要な強みはなんだと思いますか。以下から選択してください。 (複数回答可・上位10回答)	
英語—世界語としての英語	128
伝統—文化—文化的遺産—保守性	127
安定した経済—経済力	71
教育制度—教育レベルの高い人々	56
君主制—イギリス王室	54
世界的な影響力	47
栄光ある過去—イギリスの旧植民地とその歴史	44
愛国主義—統一された国—誇り高き国民	44
民主主義—言論の自由	32
安定した政治制度—信頼にたる政府	27
安定した貨幣	27

おわりに ～調査所見と今後の課題～

今回は中間報告という性格上、調査の全容を提示することができなかったばかりでなく、紙面の都合上、大まかな論点のみを示すにとどまった。とくに今回は連合王国としてのイギリスについて、構成各国であるイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドに関する各項目で興味深い回答結果が出ているものの記載することができなかったため、それらの項目については最終報告に譲りたい。また、今回質問と回答それぞれの項目を整理して見えてきた課題は、サンプル数の増加と対象年齢層の均等化をどう達成するかということである。目下開設中の本ウェブサイトへのアクセス数はいまだきわめて限定的であることに加え、回答者の年齢層に偏りがある。先述のように、TOE (1999, 2000) のターゲット層と近似していたことは幸いであったが、年齢層が合致していたわけではない。仮に、より幅広い年齢層からの回答を入手できれば、より全般的な統計結果が得られるだけでなく、TOEの実施時期の回答者(24歳から35歳まで)が40代・50代となった現在の見解も追跡調査でき、調査の意義自体も深まる。残りの研究期間では、あらゆる人的ネットワークを駆使してサイトの周知を図り、有効

回答数を増やしていきたい。

ともあれ、今回の中間報告で、日本における対イギリス・イメージに関する概観のようなものはひとまず描くことができたのではないかと。調査中とくに興味深かったことは、イメージの抱き方というものは一元的なものではなく、大まかに分けて「醸成されてきたイメージ」と「事件や契機がもたらすイメージ」が相対するかたちが存在するということだ。つまりそれは、長年かけても簡単には変化しないもの（固定観念？）と、ある特定の時期の話題性やその際のメディアの取り上げ方によって短期間に印象付けられるもの（インパクト）である。前者の例としては、イギリスは——肯定的にも否定的にも——伝統的・保守的な国であるというイメージがあり、後者には往々にして、いわゆる「時の人」が含まれるだろう。もっとも後者の場合、前述のように、最近ジェンダー間の平等を訴えることで注目を浴び、今回の調査でも著名人として上位に入ったエマ・ワトソンが、『ハリー・ポッター』のハーマイオニーという役柄のイメージから大きく脱皮して今後も活躍をつづければ、同映画の主人公であったダニエル・ラドクリフをつねに凌ぐ人気女優（あるいは社会活動家）としての地位を築き、名実ともに「簡単には変化しない」アイコンへと変わっていく可能性はあるだろう。そしてその過程にも、さまざまなイメージが合間に紡ぎこまれていくことになる。本調査を行う際、時勢やトレンドに大きく左右される、このように可変的で不安定なイメージの解釈にはつねに注意を払っていかねばならない。

冒頭でも述べたとおり、本調査の最終目的は、イギリスの対外文化政策がイメージ調査をどのように活用し自国のイメージ向上に役立てていったのか、その戦略と成果を探ることである。去るTOE調査では、イギリスに関する情報収集時に回答者の多くが彼ら自身の国の情報ソースを利用するという結果から、イギリスの対外文化政策にも「各国メディアにどう働きかけるか」が課題として提示された。今回の調査では、トレンドはインターネット経由の情報収集にシフトしたかのように思えるが、それでも自国の新聞やテレビニュースという従来のメディアを利用する回答が激減したわけではなかった。情報のソースがますます多様化・複雑化するなか、イメージのような抽象的でつかみどころのないものから着想し、実体のともなった政策を立案することには多くの困難がともなうだろう。しかし、「ソフト・パワー」の有効性が各所に顕在化しはじめた21世紀の現在、本調査にも少なからずの価値が存在すると考えたい。

〈付録：「イギリス・イメージ調査」質問項目〉

1. 年齢層をお答えください。
2. 性別をお答えください。
3. あなたの第一言語をお答えください。
4. イギリスへの渡航・滞在経験はありますか。以下のうち、もっとも長い期間に該当するものを選択してください。〔選択肢省略〕
5. 2012年夏に開催されたロンドンオリンピックによって、イギリスへの関心は深まりましたか。
6. 以下の諸外国のことを、どれほど知っていると感じますか。
(1) アメリカ合衆国、(2) イギリス、(3) オーストラリア、(4) 中国、(5) ドイツ、
(6) ロシア
7. 以下の諸外国について、どのような印象を持っていますか。〔6と同じ選択肢〕
8. 貿易の相手国として、以下の諸外国をどう思いますか。〔6と同じ選択肢〕
- 9-A. 以下の諸外国は、どれほど世界的に有名な企業を持っていると思いますか。〔6と同じ選択肢〕
- 9-B. このほかに、有力企業を有すると思われる国を挙げてください。
- 10-A. 以下の諸外国は、どれほど科学技術において先進性をそなえていると思いますか。〔6と同じ選択肢〕
- 10-B. このほかに、科学技術において先進的だと思われる国を挙げてください。(自由記述)
11. 以下の項目を発明・開発したと思われる国を答えてください。
(1) ペニシリン
(2) WWW (The World Wide Web)
(3) クローン技術
12. 以下の諸外国のうち、留学するとしたらどこを選びますか。
13. 以下の諸外国のうち、将来のキャリアアップにつながる教育を行っていると
と思われる国はどこですか。
14. 習得したいと思う外国語は以下のうちのどれですか。
15. 「英語は世界語」とよく言われますが、以下の各項目ではどの程度重要だ
と思いますか。
(1) 国際的ビジネスにおいて、(2) 教育（国内および国外）において、
(3) 海外旅行において
16. イギリスは連合王国です。以下から構成国を選んでください。〔選択肢省略〕
17. イギリスと言えば、なにを思い浮かべますか。3つ以内でキーワードを
挙げてください。わからない場合は空欄可。

18. イングランドと言えば、なにを思い浮かべますか。3つ以内でキーワードを挙げてください。わからない場合は空欄可。
19. スコットランドと言えば、なにを思い浮かべますか。〔以下、18と同様〕
20. 北アイルランドと言えば、なにを思い浮かべますか。〔以下、18と同様〕
21. ウェールズと言えば、なにを思い浮かべますか。〔以下、18と同様〕
22. イギリス社会というと、どれほど現代的（モダン）で、どれほど伝統的なイメージを持っていますか。
23. イギリスの芸術に関する以下の記述について、あなたの印象をお答えください。
- (1) イギリスは芸術において創造性と革新性を持っている
 - (2) イギリスの芸術における名声は、現在よりも過去の作品によるところが大きい
 - (3) イギリスのデザイン芸術は世界中で知られている
24. イギリス出身の著名人を3人以内で挙げてください。知らない場合は空白可。
25. イギリスが以下の諸外国との関係をどのようにとらえていると思いますか。
- (1) ユーロッパ（EU）、(2) アメリカ合衆国、(3) 英連邦諸国（旧植民地）、
 - (4) 日本
26. 現代イギリス社会に関する以下の記述について、お答えください。
- (1) イギリスの政府は、民主的政府の好例といえる
 - (2) イギリスはEU（欧州連合）のなかで主導的役割を担っている
 - (3) イギリスは健康保険サービスに秀でている
 - (4) イギリスはもはや階級社会ではない文化社会である
 - (5) イギリスは真の多文化社会である
 - (6) イギリスの法制度は、すべての人々に平等な裁判の機会を与えている
 - (7) イギリスは環境保護に積極的に関与している
 - (8) イギリスのメディアは真実を報道している
 - (9) イギリス社会で女性は差別されている
 - (10) イギリス人は外国人に対して好意的である
 - (11) イギリス人は異人種に対して寛容である
27. イギリスのメディアは、日本のメディアと比べてどれほど誠実だと思いますか。
- (1) はるかに誠実、(2) やや誠実、(3) 同じくらい、(4) やや劣る、
 - (5) かなり劣る、(6) 知らない／わからない
28. イギリスのメディアは日本のメディアと比べると、質が高いと思いますか。
29. イギリス製品とサービス産業の質は、日本よりも高いと思いますか。

30. イギリス製品やイギリスのサービスであることが判明することで、あなたの購買（利用）意欲は増すと思いますか。
31. 全体的にみて、イギリスのもつ主要な弱点はなんだと思いますか。以下から選択してください。（複数回答可）
- (1) 伝統的—保守的—時代遅れ—革新的でない—柔軟性に欠ける
 - (2) 君主制—王室の影響／スキャンダル
 - (3) 北アイルランド問題—宗教—戦争—国内的対立—テロリズム
 - (4) 人種差別—人種主義—外国人嫌い—偏狭・非妥協的気質—不親切さ
 - (5) 冷酷—よそよそしさ—無愛想
 - (6) 紳士気取り—傲慢—高飛車
 - (7) 自国に過去の栄光にすぎりすぎ—すでに世界的覇権を失っているにもかかわらず、過去のイギリス帝国（大英帝国）の幻想をいまだ拭いきれないところ
 - (8) 高慢—尊大—自己中心的
 - (9) 悪天候—霧—雨
 - (10) ヨーロッパやEUに関する無関心
 - (11) 地理的偏狭性—島国根性
 - (12) 階級社会
 - (13) 福祉制度における社会的差別
 - (14) アメリカ合衆国への依存
 - (15) 被雇用者の多さ
 - (16) 不景気
 - (17) 政治制度
 - (18) 生活費の高さ
 - (19) 道徳心の欠如—快楽主義
 - (20) フォークランド紛争
 - (21) 非衛生的
 - (22) 多民族国家
 - (23) その他
 - (24) 弱点は存在しないと思う
 - (25) 知らない／わからない
32. 全体的にみて、イギリスのもつ主要な強みはなんだと思いますか。以下から選択してください。（複数回答可）
- (1) 伝統—文化—文化的遺産—保守性
 - (2) 安定した経済—経済力
 - (3) 教育制度—教育レベルの高い人々

- (4) 英語—世界語としての英語
 - (5) 安定した政治制度—信頼にたる政府
 - (6) 民主主義—言論の自由
 - (7) 栄光ある過去—イギリスの旧植民地とその歴史
 - (8) 安定した貨幣
 - (9) 良好なビジネス
 - (10) 良好な産業
 - (11) 愛国主義—統一された国—誇り高き国民
 - (12) 創造性—革新性—先進技術
 - (13) 人々の即断力—忍耐力—自信
 - (14) 君主制—イギリス王室
 - (15) 軍事力
 - (16) 多文化社会—異人種の共存
 - (17) 世界的な影響力
 - (18) 外国政策—諸外国との良好な関係
 - (19) 地理的特性—島国であること
 - (20) 資本主義
 - (21) 誠実さ
 - (22) 人々の勤労意欲の高さ
 - (23) その他
 - (24) 強みはないと思う
 - (25) 知らない／わからない
33. イギリスに関するあなたの意見を構築する上で、もっとも重要な情報源を以下から挙げてください。(複数回答可)
- (1) 日本の新聞
 - (2) 日本のテレビやニュース
 - (3) 日本のラジオ
 - (4) 日英で刊行された書籍
 - (5) 日英で刊行された雑誌
 - (6) インターネット
 - (7) イギリスの新聞
 - (8) BBC ワールドのテレビ
 - (9) BBC ワールド—サービス
 - (10) イギリス映画
 - (11) イギリス音楽

- (12) 日英以外の海外の報道
- (13) 海外のその他のラジオ
- (14) 口コミーちまたの話題
- (15) 友人や家族からの話題
- (16) 学術関係の情報
- (17) 実際に自分でイギリスを訪問すること
- (18) イギリスを訪問したことがあるひとからの情報
- (19) イギリス人からの情報
- (20) 大使館関係
- (21) イギリス観光庁
- (22) イギリスのその他の公的機関
- (23) プリティッシュ・カウンシル
- (24) その他
- (25) 知らない／わからない

注

- (1) 本調査の実施機関であるプリティッシュ・カウンシル（The British Council）は、イギリス外務省が所管する国際交流機関であり、現在、世界100カ国以上に事業所を展開している。
- (2) ‘Through Other Eyes’（The British Council, 1999, 2000）以下から冊子（PDF）を入手可能。<http://classic-web.archive.org/web/20011115212541/http://www.britishcouncil.org/work/survey/reports.htm>（2016年1月7日最終閲覧）
- (3) ‘As Others See Us’（The British Council, 2014）以下から冊子（PDF）を入手可能。<https://www.britishcouncil.org/sites/default/files/as-others-see-us-report.pdf>（2016年1月7日最終閲覧）
- (4) ‘Through Other Eyes’と‘As Others See Us’は、プリティッシュ・カウンシルが国際世論調査機関であるMORI（Market and Opinion Research International）からの助言を受けて作成された。
- (5) <http://www.f.waseda.jp/aiko/>（2016年1月7日最終閲覧）調査期間は、2012年10月より2017年3月までである。ウェブサイトの開設およびメンテナンスは、(株)アーティス（本社：静岡県浜松市。営業所：東京都千代田区）に委託した。
- (6) 本告知ページでも、冒頭で「このアンケートは、本サイトをご覧のみなさんが『イギリス』あるいは『イギリス人』について、どのような印象を持っているのかを調査するものです」と記載し、回答者の国籍を限定しないよう配慮した。
- (7) ‘Through Other Eyes’（The British Council, 2000）, p. 1.
- (8) ペニシリンは1928年にイギリスのアレキサンダー・フレミング（Alexander Fleming）によって発見された。ティム・バーナーズ＝リー（Tim Berners-Lee, 1955-）は、1980年代後半から90年代初めにかけて、ベルギーのロバート・カイリューとともに、WWWを考案した。1990年代末、世界ではじめて哺乳類の体細胞

- クローンである雌羊ドリー（Dolly）が誕生したのは、イギリススコットランドのロスリン研究所である。
- (9) <http://www.britishairways.com/cms/global/pdfs/Release-Survey1-24Jan13.pdf>
 - (10) メリル・ストリープ主演『マーガレット・サッチャー～鉄の女の涙～』（*The Iron Lady*, 2011年）やドキュメンタリー映画『マーガレット・サッチャー～鉄の女の素顔』（*Margaret Thatcher: the Iron Lady*, 2012年）など。
 - (11) 2014年9月にジェンダーの平等を国連で訴えるエマ・ワトソンのスピーチ：
<http://sociology.about.com/od/Current-Events-in-Sociological-Context/fl/Full-Transcript-of-Emma-Watson-s-Speech-on-Gender-Equality-at-the-UN.htm> (2016年1月9日最終閲覧)
 2015年1月の世界経済フォーラムにおいてジェンダーの平等を訴えるエマ・ワトソンのスピーチ：
<http://www.businessinsider.com/emma-watson-davos-equality-speech-2015-1> (2016年1月9日最終閲覧)
 - (12) 詳細は、渡辺愛子「主要先進諸国における国際交流機関調査 報告書～英国～」、国際交流基金（2003年3月）、pp.165-244を参照のこと。
 - (13) 女権拡張運動の先駆者として知られるウルストンクラフト（Mary Wollstonecraft）が『女性の権利の擁護』（*A Vindication of the Rights of Woman*）を刊行したのは、1792年のことである。
 - (14) たとえば、現在首都ロンドンの人口の約45%は、非ヨーロッパ系イギリス人で構成されている。—Philip Thody, *Europe since 1945* (London: Routledge, 2000), p. 297.
 - (15) TOE（2000）によると、日本での情報源は‘Local Press’が54%、国内テレビニュースが61%となっている（p.101）。

Measuring Images of Britain in Japan: a Mid-term Progress Report

WATANABE Aiko

This research note shows ad interim results of on-going research focussing on the way Britain is perceived by people with Japanese language competence. Positive images of a country serve the national interest by boosting sales of the country's products overseas, increasing the number of incoming visitors to the country, and helping to avoid international conflict. Based on this assumption, Britain's international cultural organisation, the British Council, with the stated purpose of building 'mutually beneficial relationships between people in the UK and other countries', conducted a project called 'Through Other Eyes: How Others See Us' in 1999 and 2000. More than 30 countries, including Japan, were chosen as the subjects of this project. Analysis of the results allowed the British Council to develop unique strategies in each country to correct misunderstandings about Britain and British people, and to improve the country's image, making full use of internet publicity, appealing to overseas media, and supporting human interactions.

It has been 15 years since the project was undertaken, and it seems to be appropriate timing to execute a follow-up survey, investigating the change and continuity of people's perceptions of Britain that are Japan-based and Japanese proficient, by using almost the same methodology as the British Council. This is the reason why I launched the website called 'Britain's Image Survey' in October 2012, and this time, as a mid-term investigation, I selected 14 main questions out of 33, and analysed 175 valid answers (163 answers were made by people whose mother tongues were Japanese; the rest non-Japanese).

Overall, general perceptions of Britain have not changed drastically, but some findings were worth noting: 1) whilst the majority of people view Britain as a conservative country with a long history, this perception is basically positive rather than negative; 2) Britain is recognised as an innovative country, but still behind the United States and Germany; and 3) people representing Britain are a mixture of historical figures and celebrities in the news, the latter many have only a short-term impact. There are a couple of points I would like to modify for the remainder of my research period (ending in March 2017) such as: 1) to increase the number of

respondents; and 2) where possible, balance respondents' age groups. In addition to covering all 33 questions and answers, the final objective of my research survey is to evaluate whether the Council's countermeasures during the last 15 years have been successful or not.